

II-C-O-91

腎細胞癌組織におけるBrdU標識細胞の免疫組織化学的検討

大田原佳久¹、鈴木和雄¹、田島 惇²、河邊香月¹、阿曾佳郎²(浜松医大・泌尿器¹、東大・泌尿器²)

腎細胞癌においては、その臨床経過は病理組織学的悪性度と必ずしも一致しないことがある。今回我々は腎細胞癌組織におけるBrdUの取込みを免疫組織化学的に検討し、病理組織学的所見と比較した。[対象と方法]手術により摘出された腎細胞癌32症例を対象とした。摘出標本の一部(肉眼的に細胞増殖性の高いと思われる部位)を採取し、直ちにBrdUを含む培地で培養し、BrdUの取込みを検討するため、抗BrdU抗体によりPAP法により免疫染色を行った。腎細胞癌の病理組織学的診断は腎癌取扱い規約に準じて行った。[結果・考察]腫瘍細胞の悪性度G3の症例ではBrdU標識細胞出現率は明らかに高率にみられた。しかしG1、G2ではBrdU標識細胞出現率に大差はみられなかった。転移症例および浸潤様式の $\text{INF } \beta, \gamma$ を示す症例で有意に標識細胞が高率にみられた。組織学的構築型では充実型、乳頭型のもので、また細胞型では多形細胞型の症例で標識細胞が高率にみられた。まれに胞巣型で淡明細胞亜型の症例でも標識細胞が高率に出現した。腎細胞癌の組織学的悪性度とBrdU標識細胞の標識率はほぼ一致する。BrdU標識細胞が高率に出現する症例では注意深く経過観察を要するものと考えられた。

II-C-O-92

移行上皮および移行上皮癌におけるモノクローナル抗体MRG-1の反応性

栗本重陽¹、高田邦昭²、森山信男¹、阿曾佳郎¹、崔 永喜³、野澤志朗³、岩森正男⁴、平野 寛²
(東京大・医・泌尿器科¹、杏林大・医・解剖²、慶應大・医・産婦人科³、東京大・医・生化⁴)

モノクローナル抗体MRG-1(免疫原:ヒト卵巣 粘液性嚢胞腺癌由来培養細胞株)は、タイプⅢA型糖脂質と特異的に反応し、ヒト子宮頸部扁平上皮では、抗原の局在が癌化に伴い細胞膜より細胞質へと変化する(第32回組織細胞化学会総会, 1991)。今回、異なる組織型の重層上皮における局在を検討するため、ヒト正常膀胱移行上皮および癌組織に本抗体を適用して光顕的並びに電顕的に観察した。

[方法]光顕観察には、正常移行上皮6例、表在癌19例、浸潤癌10例を対象とし、10%ホルマリン固定、パラフィン包埋薄切標本を作製、ABC法により染色した。一部の症例については、凍結切片(4%ホルマリン固定、1乃至5 μm)を用いたABC法または蛍光抗体法による光顕観察、および包埋前染色法(4%ホルマリン固定+0.5%ホルマリン固定、凍結厚切片作製)による電顕観察も併せて行った。

[結果と考察]パラフィン切片を用いて光顕的に観察すると、正常部位では、上皮全層にわたり細胞の細胞膜、および細胞質全域が反応陽性であった。一方、浸潤癌では陰性であった。また、表在癌では、陽性所見は一部の細胞に限局し、且つ細胞質、とりわけ核周囲部に顆粒状または線状に分布した。これに対して、凍結切片法による光顕観察では、表在癌においても細胞膜が陽性であった。さらに電顕観察でも細胞膜、ゴルジ装置、核周囲の小胞に陽性であった。このように組織の処理方法により、染色性に差が認められた。